

特集
このまちで
安心して
暮らしたい

化学物質におびやかされる地域から



相次ぐ廃プラ圧縮施設計画

活かされない杉並病公害の教訓

文・写真 川名英之
環境ジャーナリスト

東京・杉並区にある不燃ゴミ中継施設「杉並中継所」。この施設のプラスチックゴミ圧縮過程から発生する毒性化学物質によって呼吸困難などが引き起こされた。「杉並病公害」だ。問題の中継所は2002年6月に公害等調整委員会により「健康被害の発生源」と認められた。だが操業は今なお続けられ、重い患者はこの街に住めないままだ。この教訓をよそに、同種施設が全国各地に建設され始めた。



▲地下の不燃ゴミ圧縮施設から発生する杉並病原因物質を大気中に排出してきた杉並中継所の排気塔・換気塔（手前）と患者が多発した杉並区北部の住宅街。患者はとりの練馬区でも発生した（毎日新聞社提供）
▶杉並中継所の排気塔。台座部分が換気塔になっている

深刻な住民の健康被害

まず杉並中継所の機能と杉並病の実態を見よう。杉並中継所は、東京湾岸の処理センターに不燃ゴミを運ぶ車両数を少なくするためのゴミ容積圧縮施設で、東京都清掃局（当時）が1996年3月、杉並区立井草森公園地下に建設した。杉並区と周辺区一部地域の家庭から出るプラスチックなどの不燃ゴミを地下の作業場で圧縮、収集車8台分の容積を大型コンテナ車1台分に減らしている。

この作業で発生した汚染物質が、集塵器と脱臭装置を通じて地上に突き出た排気塔と換気塔から大気中に放出されている。稼働初期には浄化設備が極めて不備だったため、特に多量の汚染物質が排出された。

杉並病は同年3月の杉並中継所試運転段階から発生しはじめ、杉並区井草4〜5丁目では環境に異変が生じはじめ

た。4月に本格稼働すると、周辺住民の間に「息苦しい」「目が痛い」などという訴えが続出。同年11月に杉並区が実施した住民健康調査では319人が健康不調を訴えた。

汚染大気は本格稼働以降、9月下旬まで確実に拡散した。被害者たちが杉並中継所の排出する汚染物質を吸い込んで苦痛を感じた地点と日付を聞き込みで調べて作った図（次頁参照）が参考になる。

中継所近くの住民の中から重症患者が相次いで発生し、緊急入院した。そのうちから数例を紹介すると――

星谷昇子さん（56歳）は中継所の排気塔・換気塔から西へ約百メートルの距離にあるマンション3階で雨天以外、昼も夜も中継所に面した東側の窓を開け放って暮らしていた。このため排気塔からの各種毒性化学物質が室内に入りこみ、6月半ばごろから吐き気や胸苦しきなどの症状が出はじめ、その月の下旬から呼吸困難や後頭部激痛で入院をくりかえした。

身体が化学物質に敏感になり、やがて和歌山県新宮市に引っ越したが、ゴミ焼却や自動車排出ガスなどのせい、病状はよくない。現在の症状はのどや胸の詰まり感、腹の膨張、後頭部から肩甲骨にかけての硬直、頭痛、背中の不快感と痛み、口内炎、せき込み、ゲップ、湿疹など多数。星谷さんは「今生殺しのような状態が続いている。死ねればもっと早く死にたかった」と述懐する。

中継所の南約百メートルに住む津谷裕子さん（74歳）は中継所の本格稼働が始まった直後の4月3日から汚染物質を吸い込み、せき込みや血圧の記録的な上昇、頭がボーッとして顔がほてるなどの症状が現れた。その後、症状は次第に重くなり、6月に緊急入院した。その病院にも汚染物質が届くようになったため転居を繰り返した。

中継所から約百メートルの斉藤恵子さん（64歳）は稼働2ヵ月後の6月、うごめ喉が赤く腫れ、舌にも腫れ物ができた。翌年4月、体が肥満になり、乳房が張っ

て一時は前途を悲観したという。専門医は「化学物質による性ホルモン異常」と診断した。

中継所から百数十メートルの住宅に住んでいた水野愛子さん（74歳）も6月ごろからのどと目の充血・痛み、視力の低下が生じた。中継所近くには住めない、週日は静岡県御殿場市で生活。井草に帰ると、よくなりかけた体調がまた悪くなるという。

中継所の北西約四百メートルのY子さん（63歳）は96年春先から呼吸が苦しい、頭痛、視力の衰え、眼がかすむなどの症状に悩まされた。病状は悪化傾向をたどり、やがて両腕や左足、右半身がガタガタ震えて働けなくなり、98年に悔しい思いで会社を辞めた。

中継所の南約百五十メートルの保育園では経営者の八十島歌子さん（70代後半）が96年7月ごろから胸の苦しきや視力の低下、湿疹などの症状が出たほか、保育園の職員（9人）や乳幼児（20数人）の中にも結膜炎や湿疹、下痢、体がだる